



2014年12月10日放送

頻用処方解説 清肺湯

秋田大学 総合地域医療推進学講座 蓮沼 直子

1. 主な効能

本日お話しする清肺湯は、字の如く肺を静める、肺の熱を清めるという意味です。肺熱というのは肺の炎症ですから、抗炎症作用のある方剤といえます。清肺湯は、慢性に経過した呼吸器疾患で粘稠な喀痰を伴う咳嗽などに用いられ、慢性気管支炎の第一選択ともいわれています。主に鎮咳去痰作用、抗炎症作用のある生薬が主となっています。

2. 処方の出典・処方名の由来

清肺湯の出典：1587年明の搜廷賢の著した『万病回春』に記述があります。咳嗽門に「一切の咳嗽、上焦、痰盛んなるを治す」と書いてあります。つまり咳嗽がひどく、肺に痰がたくさんあるものを治すということです。

また咳嗽の咳とは音があつて痰がないもの、嗽とは痰があつて咳を起こすものと両者を区別しています。「咳嗽は肺気を傷つける故に脾に湿を生じて痰がおこってくる」と『明医雑著』(1502年刊、王綸著)に書かれています。肺と脾は五行では母子関係にある臓器です。

『万病回春』には条文が3つありますが、その内容を解説します。

1番目：「痰嗽は、嗽動すれば則ち痰聲有り、痰出づれば嗽止む、是なり嗽して痰多き者脾虚也」。

痰が多く咳をするとゼロゼロと音がして、痰が出ると咳もおさまります。そのようなものを痰嗽といい、咳をして痰が多い者は脾虚であるということです。痰が切れるまで、激しく咳き込むというのが1つの特徴です。基本的な条文の基になるのがこの表現です。

2番目：「肺脹嗽は、嗽するときは則ち喘満気急す。喘満して眠ることを得ざる者は治し難し」。

喘息の咳で、咳をするとゼイゼイし、胸が息苦しく、呼吸が速くなります。喘鳴と呼吸困難があって眠れない者は難治であるという意味です。

清肺湯は、喘息にも非常によく処方され、特に感染症の喘息タイプで、痰が出てあるいは痰があるがすっきり出きらなくてというタイプの喘息で、麻黄が使えないような症例に非常に良いことがあります。

3 番目：「久嗽止まざるは、労怯（虚劳の意）と成る。若しくは久しく嗽して聾啞する、或いは喉に瘡を生ずるものは、是れ、火肺金を傷る也。ともにこれは治し難し、もしくは気血衰敗し、聾啞し失音する者もまた治し難し」。

慢性の咳が長く続くと虚劳のような状態となります。もし咳が長く続いて声が嘎れたり、咽喉部に炎症をおこしている者は、何れも難治であるという意味です。

条文の意味は、清肺湯はどちらかといえば、気管支炎が慢性化し遷延化したもので、非常に咳が長引いて声が出なくなったり、喉が痛くなったり、喉にできものができたりの状態に使うということです。

「以上の三条は、ともに後方に宜し」と記載があり、その次に清肺湯という名前が載っています。

処方名の由来：本方は、慢性に経過した呼吸器疾患で、粘稠な喀痰を伴う咳嗽などに用いられます。その病態を肺に停留した火熱と考え、肺熱を清さす湯剤の意味で清肺湯と名づけられたといわれています。

3. 構成生薬

次に配合生薬の構成を述べます。清肺湯は黄芩・桔梗・茯苓・陳皮・当帰・貝母・桑白皮・天門冬・山梔子・杏仁・麦門冬・五味子・甘草・大棗・生姜の 15 味からなります。15 味のうち当帰と甘草を除く 13 味はいずれも肺に作用します。

黄芩、桑白皮は肺火を瀉し、桔梗、茯苓、山梔子は肺熱を瀉し、貝母、麦門冬は肺を潤し、天門冬、麦門冬は肺金を清し、五味子は肺気を収斂し、貝母は肺蘗を散じ、杏仁は肺を瀉す働きがあります。そして、茯苓・陳皮・桔梗・貝母・桑白皮・杏仁はいずれも痰を除く働きがあります。当帰と甘草は血脈を整え、逆気を和する働きがあるとされています。したがって、清肺湯全体としては、主に肺に生じた火熱を瀉し、痰を去るという作用があると考えられます。

現在のエキス製剤として出ている清肺湯はこの 15 味ではなく、これに竹筴が入っています。『万病回春』の中には条文の後に色々な加減方が書いてあり、例えば「血痰を吐き出すには……竹瀝など」を加えるとの記載があります。竹瀝は淡竹または葉竹を火で炒ると汁が出ますが、この液体のことを竹瀝といい、瀝というのは“したたる”の意味です。これを引用してエキス剤に入れたが、竹瀝はなかなか手に入らないので、代わりに竹筴などを入れるようになったようです。肺の火熱とは肺の炎症性病変を意味すると考えられますから、この清肺湯の構成生薬には肺の炎症を治し、咳を鎮め、痰を除くものが多く含まれていることがわかります。

4. 古医書における記載

古医書における記載をみてみましょう。古典の中には清肺湯の使い方がたくさん記載されていますが、例えば浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤藥室方函口訣』を読むと、「此の方は、痰火喉（咳）嗽の薬なれども、虚火の方に属す」。実火、実の炎症ではなくどちらかというといゆる慢性消耗性の「虚」の気道の炎症に使うという記載です。「若し痰火純火にして脈滑数なる者には搜氏は栝楼枳実湯を用う」ということで、より炎症が強くて胸痛があったり、喀痰の粘稠度が高いという場合には、この清肺湯よりも栝楼枳実湯を用いるということです。もう少し病態が遷延化した気道の炎症性疾患に清肺湯を用いるということが言われています。浅田宗伯の言う「痰火喉（咳）嗽、虚火の方、肺熱あって、とかく咳の長引きたる者、労嗽をなす者」といった症候が清肺湯を用いる重要なポイントであるといえるかと思えます。

5. 現代における用い方

比較的体力が保たれている者で、長引く咳と多量の膿性痰がある場合に用いられます。臨床症状として、咳と痰が長引き止らない・痰は粘稠で切れにくく量も多い、多くは膿性である・咳は激しく連続的に出て、痰が出るまで続く・咳のために声がかすれたり喉が痛んだりする、というような特徴を示すものが多く、慢性気管支炎、気管支拡張症、気管支喘息などの慢性呼吸器疾患に用いられることの多い処方です。

加藤らは COPD に対する治療として GOLD 分類のⅡ期において 6 ヶ月間、禁煙のみの群と比較して有意な効果が認められたと報告しています。また併用 24 ヶ月後に画像所見で有意な改善がみられており、器質化性肺炎像や気管支の閉塞像が改善されています。これより清肺湯は COPD の呼吸器臨床症状のみならず、画像所見も改善する可能性を示唆しました。西洋医学的治療と漢方の統合療法が効果的であるとまとめています。

6. 処方適応のポイント

矢数道明（1905-2002）・大塚敬節（1900-1980）らの『漢方診療医典』（南山堂,1973, p.394）によりますと、「清肺湯は慢性の経過をとっている胸部疾患で、胸部に熱が残り、咳嗽、喀痰が長引きなかなか止まらぬものに用いる。痰が多く、激しい咳が続き、しかも痰は粘稠で切れにくい、長引くと咽が痛んだり、声が嘎れたり、ムズムズしたりする。痰が出るまで激しい咳が続くことが多い。（略）本方証は麦門冬湯の証によく似ているが、痰の切れは麦門冬湯よりはよく、その量が多い。上逆は軽い。以上の目標に従って、慢性気管支炎、（略）、気管支拡張症、気管支喘息（略）慢性咽頭炎などに応用される。」と記載されています。

7. 類方鑑別

類似処方との鑑別ですが、清肺湯が粘稠な膿性痰を比較的多量に喀出するのに対して、麦門冬湯は乾性の咳嗽、咳こむと咳が咳を呼ぶかたちになり、ますます咳きこむという発作的咳きこみが主で喀痰はほとんどありません。麻杏甘石湯は粘稠で切れにくい痰が類似

しているが、亜急性期の気管支炎や気管支喘息に用います。

小青竜湯は呼吸困難感や喘鳴は共通するが、比較的さらさらとした粘稠度の低い喀痰が多く出る者に用い、アレルギー素因を認める例が多いといわれています。柴朴湯は呼吸困難感や喀痰がつまる不快感が主訴で、実際の喀痰はそれほど多くありません。竹筴温胆湯は亜急性期の気管支炎で微熱や不眠があるときに用います。

麻黄附子細辛湯は新陳代謝の低下した高齢者の感冒の咳嗽に処方します。発熱や痰の多い少ないには関係しません。麻黄を含むため2週間を越えない処方がすすめられています。滋陰降火湯はやや慢性化した気管支炎で、主に夜間咳きこみ、ごく少量の粘性痰を出すときに用います。血の乾きが主となっておこる咳嗽ともいわれています。それに対し清肺湯は主に朝起床時に喀痰が多く、慢性の要素が強い例に使用します。

滋陰至宝湯は慢性気管支炎で粘稠な喀痰の出る者に使用します。清肺湯に比べると、体質体格のやや虚弱な者に用います。(鑑別の難しい場合が多い) 人参養榮湯は慢性の呼吸器疾患で、体力が低下し、顔色不良、疲労倦怠感の強い者に用います。

8. 症 例

最後に症例ですが、私自身は清肺湯の使用経験が多くありませんので、大塚敬節の『症候による漢方治療の実際 (p.250~251)』の症例を一部紹介します。

症例は36歳の男性。数年前より咳嗽があり、この咳嗽は午前中、ことに起床後1時間ほどが甚だしく、痰も多く、たちまち痰壺に一杯になるといいます。(略)患者は色浅黒く、栄養状態も上等ではありませんが、長期療養としては悪い方ではありません。食欲も普通で、大便も1日一行あります。(略)聴診上、左背下部にラ音(略)。腹部を診てみると、中等度に弾力があり、軟弱無力というほどではありません。これに清肺湯を与えました。

(略)3ヵ月ほどで痰が半減し、(略)服薬を始めて10ヵ月、その間、1回の喀痰もなく、痰も朝少しでるだけで治ったようだといいます。参考になる症例と思われます。以上清肺湯についてお話ししました。